

子ども食堂の方向転換を促すもの

—社会変動に対応していくためには—

小出 美雨

第1章 社会変動に対応していく子ども食堂

本稿はコロナ禍において活動形態が変わった子ども食堂、真の対象者は誰なのか、今後どのような子ども食堂が求められるのかを分析し、考察する。なお、本稿は社会変動を鍵に書いている。ここでいう社会変動とは、年々進む少子高齢化や貧困問題、新型コロナウイルス、今後起こりうるとされる南海トラフ地震など私達の生活に大きく影響している問題であり、現在も問題の解決が見えない問題を指している。第1章では、なぜ社会の流れの変化や支援を求める人の変化について調査するのか調査理由や調査しようと考えたきっかけを述べる、第2章では調査方法と調査目的を述べる。第3章ではZOOMインタビューや実際に参加した子ども食堂さんから感じたことなどを踏まえた調査結果を述べ、第4章では調査結果を踏まえ、社会の流れに沿った子ども食堂についてさらに深く掘り下げて論じる。第5章では実際に私が度々参加している「よつ葉子ども食堂」さんでのコロナ禍になってからの参加者などの変化や心情などをまとめ論じる。第6章では以上のことを基に私自身が考える社会変動に対応していく子ども食堂とは何か、そこから見えた子ども食堂の存在について論じる。本稿を通じて、なくてはならない存在になりつつある子ども食堂が今後求められるものとは何かを知っていただくことや他の子ども食堂さんの活動を知っていただくことで、今後の子ども食堂への発展に少しでも役立つことができれば幸いである。

2020年から今日まで新型コロナウイルスが猛威を振るう中、私達は生活している。その影響は大きく、当たり前の日常を過ごすことも難しくなった。学生は学校に行けなくなり、社会人の方は時短営業やコロナによる仕事の減少などの影響で収入の減少など様々な影響があった。しかし私達の生活に影響を与えたのはコロナだけでなく、近年では2021年3月には大雨の影響による土砂災害や2022年1月19日には海底火山を原因とした津波、少子高齢化の進行や貧困問題など様々な社会問題も影響を与えている。このような社会問題がたくさんあり、いつ何が誰の生活に大きな影響を与える問題と直面するかわからない時代になっている。実際に今回の新型コロナウイルスは、誰も予想していなかった事態が起きたため日本政府も私達自身もどうすればよいか分からず、対応が遅れ、ここまでの影響が出たと言われている。毎日が私達にとって、何か変わる日なのかもしれない現状だからこそ、子ども食堂は社会の流れの変化に沿った居場所へ変化し続けていると考える。コロナ禍で多くの子ども食堂さんが会食型から配布型（フードパントリー）へ活動形態を変えた。これはコロナ禍で政府が「3密を避ける」ことを新しい生活様式としたからである。このように、社会の流れに沿った活動形態に変化を遂げることができたことで、社会の流れに沿った対象者への支援も可能になっているように感じた。先ほども言った通り、少子高齢化やコロナ禍での収入の減少など子ども以外でも様々な問題を抱えている人がいる。少子高齢化の面では、年々高齢者の一人暮らしによる孤独死の割合が増加している。それは近年、地域のつながりが薄くなっ

ていることが大きな原因とされている。コロナ禍の収入減については、時短営業によりバイトに入れなくなり金銭的に厳しくなり、退学を余儀なくされる学生や自営業でコロナ禍により辞めざる負えなくなり、借金を抱えた人などいる。コロナの拡大や一人暮らしの高齢者の増加によって、支援を求める人は様々である。生活の中で食事は欠かせないものであり、子ども食堂は現在居場所としても必要とされている。今後は更に、社会情勢に沿った居場所に変化していくと私は考える。以上のことより今後「子ども食堂＝社会の流れにあった多くの人の心と身体の拠り所」に変化していく可能性があると考えたため、この調査をしようと考えた。

第2章 調査対象・方法

調査対象は今期（2021年度）Zoom インタビューを行った子ども食堂さん、各自が参加した子ども食堂さんとする。調査方法はインタビュー内での質問とする。また、私自身が参加している「よつ葉子ども食堂」には電話などでもインタビューを行った。

第3章 調査結果

今期私達は Zoom インタビューを行い、時間などが合わなかった場合は伺うことが可能である範囲である子ども食堂さんには直接インタビューをさせていただいた。多くの子ども食堂さんにインタビューをさせていただいた。そこから様々な違いが見えた。その違いを可視化しやすくするため、以下の表とした。

子ども食堂名	現在の対象、今後の展望・活動内容
よつ葉子ども食堂	<ul style="list-style-type: none"> ・会食型、配布型ともに誰でも参加可能 ・コロナ終息まではこの形態を維持 ・終息後は会食型のみ ・終息後は夏祭りなどのイベントをしたい
太陽の家	<ul style="list-style-type: none"> ・配布型は1人親世帯（自主申告制）が対象 ・会食型は子どものみの参加 ・コロナ終息まではこの形態を維持
東山ぐうぐう子ども食堂	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ前は会食型に高齢者、子どもの参加可能 ・コロナ禍では会食型は子どものみ ・高齢者はフードパントリーへ ・コロナ終息後もこの形態で活動
みずほみんなの食堂 まなびっこ	<ul style="list-style-type: none"> ・まなびっこは子ども限定のパントリー ・コロナ前のみんなの食堂は外国籍の方や高齢者の方の居場所 ・みんなの食堂は誰でも参加可能なパントリー ・会食型再開に向けて、考えている
まんま manna 子ども食堂	<ul style="list-style-type: none"> ・現在、会食型は Facebook での予約制 ・会食型、パントリーともに対象者は決めていない ・不定期にフードパントリーを開催 ・フードパントリーは先着制 ・コロナ終息まではこの形態を維持

子ども食堂@なかぶん	<ul style="list-style-type: none"> ・配布型で中心は子どもや1人親家庭、外国籍の方（自主申告制）などが対象 ・コロナ終息後は会食型に戻す予定 ・展望としては、若いボランティアさんを少しずつ増やして多くの人に子ども食堂に興味を持ってほしい ・フードロス削減にも力を入れていきたい
おかださんの台所	<ul style="list-style-type: none"> ・対象者は子ども、高齢者、障がい者の方など様々で必要とする人は誰でも参加可能 ・現在は月に2回パントリー、1回会食型（テイクアウト可）を行っている ・高齢者の方向けに配達も行っている ・展望としては、配達に力を入れていく ・夏休みは平日に5回程度ランチを開催したいと考えている
ぬくもり♡ネットワーク	<ul style="list-style-type: none"> ・会食型、学習支援を行っており学区内の小学校に通っており、申請した子のみを対象 ・今後は人数の増加を考えている
日進絆子ども食堂	<ul style="list-style-type: none"> ・ドライブスルー形式のパントリーを月1回開催、体験学習を2か月に1回実施 ・パントリーでは大人も参加可能 ・今後は学習支援もやっていきたいが、課題が多い ・展望としてはフードドライブを行っているため、フードドライブという活動が有名になってほしい
WAIWAIのわミー	<ul style="list-style-type: none"> ・会食型で配達や送迎などの工夫 ・対象は0歳から高校生まで ・週3回相互交流型のフードパントリー形態での開催 ・パントリーは生活困窮者が対象 ・その他ホームレス支援などを行っている ・展望は支援する人される人がwin-winな仕組みになれるようにしていきたい
子ども食堂ニコニコごはん (コロナ禍で新設)	<ul style="list-style-type: none"> ・予約制のお弁当配布、誰でも参加可能 ・コロナ終息後は会食型にしたい ・今後は学習支援や配達なども取り組んでいきたい
キッチンキング子ども食堂 (コロナ禍で新設)	<ul style="list-style-type: none"> ・弁当配布の持ち帰り制で予約制 ・対象は1人親家庭であれば年齢は問わない（自主申告制）としている ・コロナ終息後は会食型にしようか検討中 ・今後週2回の開催を検討している
せんなり子ども食堂 (コロナ禍で新設)	<ul style="list-style-type: none"> ・弁当配布で子どもを中心としているが大人の受け取りも可能 ・コロナ終息後会食形式にし、月2回の開催を目指している

【表1】子ども食堂さんの主な活動形態

表1を参照して分かる通り、活動形態と対象者のちがいがみえてくる。子どもや1人親家庭の支援に取り組んでいる子ども食堂さんであれば、誰でも参加可能のところもある。特にコロナ禍で活動形態を変えると共に対象者の変化も見られた。また、活動形態を変えたことによつて見える参加者の変化なども子ども食堂さんによつて異なつた。その中でもいかにコロナが大きな影響を与えているのか、また参加者がどのように変わったのかなどを詳しく知ることができた。コロナ禍に行つた調査ということもあり、感染のリスクを抑える配布型がメインとなっている。また、コロナ前にはなかつた密を避けるという観点から、事前予約制を利用しているところも増加している。事前予約制の子ども食堂では、SNSを使った予約が多かつた。その他子ども食堂で行われるフードパントリーは、先着型が多い。会食型を実

施している所では、人数制限をしているところが多いことが分かり、コロナ前と活動状況が異なることも分かった。特に多く見られたのは活動の変化は、対象者の変化である。コロナ前は子どもや片親世帯、高齢者などある程度参加対象者を決めていた子ども食堂でも、活動形態の変化後は対象者を幅広くしていることが分かった。

また、以前の対象者さんとは別の日に、活動日を作りそちらに来てもらうなどという活動形態に変化している。コロナが世界的に大きな影響を与えたこともあり、生活困窮者の増加や学校の閉鎖なども踏まえ、多くの子ども食堂さんが対象者を増やしているのが分かる。近くの飲食店や八百屋などもコロナで影響を受けたため、無料もしくは安価で提供してもらっているため、食材費などはかからず、開催頻度を増やすことが可能になっていることも考察できる。コロナ終息後は、ほとんどの子ども食堂さんが会食形式に戻すことを考えている。

しかし、コロナの終息が未だ見えないこともあり、多くの子ども食堂さんが現在の活動形態の継続を決めていることもわかる。そして、このような困難に立ち向かいながらも活動を続けることも食堂の多くは、コロナ終息後にやりたいことや今後の展望などがはっきり明確にされていることが分かる。以上のことから活動形態や参加対象者が以前と異なり社会の流れの変化に沿いながら、必要とする人に食を届けようとしていることが分かる。子ども食堂は、コロナによって以前よりも社会の流れの変化に沿った子ども食堂になり、その時コロナや災害、社会問題などの大きな影響を受けている対象者に目を向け、多くの人が助けを求めやすい存在になったと考察する。

第4章 社会変動に沿った子ども食堂

第3章の調査結果から、子ども食堂は社会問題や社会変動に沿ったものへ変化してきていることが読み取れる。そこでインタビューさせていただいた子ども食堂さんの一部を引用し、社会の流れに沿った子ども食堂についてさらに掘り下げていく。ここでも表1を参考にしていく。WAIWAIのわミーでは会食型だけでなく生活困窮者向けに週3回のフードパントリーを開催している。運営者は『(パントリーの参加者は) コロナになって参加者が増えた。なかなか参加者が減らず、苦しんでいる人が多いと感じる。しかし、以前来ていたフィリピンやブラジル系の方が来なくなったので、仕事が見つかったのかなと思う。』というコロナ禍という社会問題と共に外国籍の方が悩んでいる就労問題など時代に背景に沿った回答を得ることができた。外国籍の方が来なくなったことで感じる就労となどの経済背景と、生活困窮者の増加という経済がまだ完全に戻っていない現状も知ることができる。また、コロナ禍で新設されたせんなり子ども食堂では『貧困から子どもを救いたいが実際にはわからない。共働きが多く孤食をしている子どもが多い。子どもの居場所になりたい。また、高齢者の一人暮らしの安否確認もしていきたい。この地域は高齢者が多く、共働き、一人親が全体的に多くなっていると住んでいて感じる。』という地域の特徴を踏まえた問題と共に、高齢化が進む社会問題や共働きなどの現代の子どもたちの家庭環境のことも考えた運営方法で、地域に寄り添い居場所になるだけでなく時代変化に沿った子ども食堂運営に取り組んでいると捉えることのできる回答が得ることができた。子どもの参加をメインとしている子ども食堂さんでは、「コロナによって学校が閉鎖してしまい、会話ができないことで子どもたちの精神状態は悪化している。だからこそ、子どもたちに寄り添い、少しでもストレス減少に近づくための環境づくりをしている。」という回答を得えられた。コロナという問題から来る子ども

もたちにとって居場所というだけでなく、心の拠り所にもなっていると感じた。

子ども食堂は2012年、東京東京大田区の一軒の八百屋さんから始まった。その後この活動は全国的に拡大し、現在は6000か所以上に増加している。子ども食堂の対象者や活動形態は以前より、各子ども食堂によって異なっていた。子どもを対象としたところや地域交流として誰でも参加可能など、活動内容は様々であった。しかし、1つだけ同じものがあった。それは全ての運営者達が「誰かの居場所でありたい」という思いで活動をしているということだ。現在、日本は少子高齢化による一人暮らしの高齢者の増加、片親世帯、共働き世帯の増加による子どもたちの孤食、コロナによりさらにつながりが無くなる地域交流など様々問題を抱えている。このように社会の流れが目まぐるしく変わっていく中で、運営者たちはどんな状況でも「居場所」であり続けようとしている。コロナにより以前とは違う形の「居場所」になったが、その存在は以前より多くの人に必要とされるものに変化した。この変化はコロナ終息後の活動にも大きく影響するだろう。コロナ禍で多くの人が子ども食堂の必要性を再確認した。以前参加していなかった人は新しい居場所として、以前からの参加者は変わらない居場所としてさらに信頼し、必要な存在へ変化した。

これらの結果から、多くの子ども食堂がその時々にかかる社会問題に対応した子ども食堂に変化していき、今後さらにその変化は続いて行くと言える。そして、その社会変動への対策としてそれぞれの子ども食堂の運営者たちが様々な工夫をして、取り組んでいることも分かった。このように子ども食堂は様々な社会問題などのその時々の問題に子ども食堂が柔軟に変化していることが分かる。その変化は参加者などの対象者が異なることでニーズがさらに拡大し、活動形態にも大きく変化を及ぼした。またその変化は今後も続き、今後さらに直面する問題や地域のニーズに沿った子ども食堂に変化していくと考察する。

第5章 よつ葉子ども食堂の活動の変化と心情

ここでは私が実際に度々参加させていただいている「よつ葉子ども食堂」を例に活動内容などの変化をさらに深くコロナ前とコロナ禍で比較をし、また運営者の心情などを論じていく。

よつ葉子ども食堂は、社会福祉法人「よつ葉の会」の1つの施設であり、名古屋市西区で活動を行っている。普段は、知的障がいを持った方が働くレストランとして運営されている。また、社会福祉法人「よつ葉の会」は名古屋市守山区で「瀬古の家みんなの食堂」としても活動されている。

以下の表は、電話インタビューを基によつ葉子ども食堂のコロナ前とコロナ禍での活動内容や参加者の変化をまとめる。

よつ葉子ども食堂の活動変化	
コロナ禍前	コロナ禍
<ul style="list-style-type: none"> ・会食型みの開催 ・月1回の実施 ・50人ほど参加していた ・外に並んで待つことは少ない ・家族での参加をお願いしており、お子さんだけの参加は断っている ・世帯での参加が多かった ・大人200円未就学児100円 ・対象者に制限はなく、誰でも参加可能 ・メニューは毎月変えており、四季を感じてもらおうようにしていた ・花見や夏祭り、クリスマス会、朗読会など様々なイベントも行っていった ・ボランティアは施設利用者さんの親御さんや社協からの紹介の方が多かった 	<ul style="list-style-type: none"> ・会食型、配布型の併用で開催 ・会食型20食、配布は50食程用意 ・誰でも参加可能 ・配布型の利用者は開始時間前に並んで、開店をまっている ・現在は家族の誰かが代表として買いに来ることが多い ・コロナ禍になってから参加する人もいる ・会食型の参加者は少なくなった ・配布型でも料金は同じ ・今まで来られたことのない参加者の方が増えた ・会食型はカレーのみ、お弁当では旬を感じられるメニュー ・イベントは開催中止（夏祭りの開催） ・ボランティアは施設職員と限られたボランティアのみ

【表2】よつ葉子ども食堂の活動

よつ葉子ども食堂コロナ禍の活動	
2020年1月	通常開催（会食型のみ）
2020年2月	開催中止
2020年3月	開催中止
2020年4月	お弁当配布のみ
2020年5月	お弁当配布のみ
2020年6月	お弁当配布のみ
2020年7月	お弁当配布のみ
2020年8月	お弁当配布のみ
2020年9月	お弁当配布のみ
2020年10月	お弁当配布のみ
2020年11月	お弁当配布のみ
2020年12月	お弁当配布のみ（クリスマスのお菓子も配布）
2021年1月	お弁当配布のみ（お正月を感じるお餅も配布）
2021年2月	お弁当配布のみ
2021年3月	お弁当配布のみ
2021年4月	会食型、配布型の併用
2021年5月	会食型、配布型の併用
2021年6月	会食型、配布型の併用
2021年7月	会食型、配布型の併用

2021年7月	外で子ども食堂の一環として夏祭りを開催
2021年8月	お弁当配布のみ（ボランティアの参加も×）
2021年9月	お弁当配布のみ（ボランティアの参加も×）
2021年10月	会食型、配布型の併用
2021年11月	会食型、配布型の併用
2021年12月	会食型、配布型の併用（クリスマスのお菓子を配布）
2022年1月	お弁当配布のみ（ボランティアの参加も×）
2022年2月	開催中止

【表3】よつ葉子ども食堂のコロナ禍での運営状況

表2ではコロナによる活動形態の変化を述べ、表3ではコロナ禍の運営状況をまとめた。こうすると活動の変化が大きく変わったことが分かる。表2、表3それぞれを参照し、まずは活動形態の変化を述べていく。活動形態で大きく変わったことは、3つある。

1つ目は「お弁当配布の開始」である。コロナ前は会食型のみで活動しており、1つの机みんなで囲みながら食べていた。参加人数は50人程度だったため、複数の世帯で1つの机を囲むこともあった。しかしコロナ禍では密を避け、感染リスクを抑えるためにお弁当配布を行った。少し感染状況が落ち着いた時には、会食型を併用した。会食型実施の際は、緊急事態宣言が出てないことを基準にしていた。また、会食型開催の際は、開始前に全ての机やイスをアルコール除菌、入口にアルコール消毒の設置、パーティションの設置、1つの机では基本的に1世帯の使用など様々な感染対策を行い、実施していた。また、それにより提供する食事内容も変わった。会食型では密を避けるために、すぐに提供でき、すぐに食事が終わるカレーライスに変わった。よつ葉子ども食堂では「四季を感じてほしい」という思いから、毎月四季を感じる食事を提供していた。例として3月にはちらし寿司や七夕をイメージした食事の提供を行っていた。しかし、季節を感じるものを提供するには手がかかってしまい、提供時間が少しかかるため、密を作ってしまう可能性があると感じ、現在はカレーライスのみになっている。コロナ終息までは毎月カレーライスなためトッピングを変えたり、小鉢を変えたりして、旬の野菜や果物を食べてもらって四季を感じてもらおうとしている。一方弁当配布では、渡すだけなので密になることは少ないことから四季を意識した食事内容となっている。暑い夏の時期には冷やし中華弁当を、12月にはチキンライス、1月には栗きんとんなど季節を感じられるものを提供している。しかし、2020年度の活動の大半が緊急事態宣言の発令や感染後の重篤化リスクなどの問題もあり、会食型の併用が難しく配布型のみの活動になったことで、その後の会食型参加率は落ち、配布型の利用者が多くなった。配布型を行うようになってからは、時間より前に開店を待ち並ぶ人もおり、お弁当は売り切れるため、需要の高さが見られる。ただ会食型の利用を望む人も多く、会食型を実施する際は売り切れることもある。

2つ目は「イベント開催の中止」である。よつ葉子ども食堂ではイベントを大切にしていた。運営者が「地域の人との交流の場でもあり、子どもたちに多くのことを体験してほしい」という信念を持たれていたからだ。実際にコロナ禍以前はクリスマス会とピアノの演奏会の開催

や夏祭り、餅つきなど様々なイベントを行っていた。しかし、コロナ禍になってからは密になる可能性があり、会話をすることが必要なイベントは中止せざる負えなくなった。2021年7月の夏祭りは、緊急事態宣言が解除されていたこともあり、外での開催を行った。以前は子ども食堂も同じ日に行っていたが、密を避けるために縁日のみの開催とした。夏祭りではコロナ前から行っている手持ち花火などを配り、楽しんだ。

「近年の子どもたちは手持ち花火をする機会が減っているから、私達で出来る願いなら叶えてあげたい」という運営者の思いから始まった。しかし、それ以降のクリスマス会など行うことはできなかった。

3つ目は「参加者の変化」である。よつ葉子ども食堂では子どものみの参加を断っていることもあり、コロナ禍前は家族での参加が多かった。しかし、コロナ禍後の配布型では家族の代表の方が1人で家族分と思われる数を持って帰られる方が多くなった。会食型では、コロナ禍前から参加していた家族もいるが数は減少したが、その代わりに新しい家族の参加が増えた。コロナ禍前の会食型で参加していた家族や高齢者の方もコロナの影響からか、密を避ける配布型の利用に変わった方もいた。また、配布型を開催したことで気軽に来やすくなったのか、初めての参加の人が増えた。

このように活動形態の変化や参加者の変化などに対応し続けていることについて、運営者は現在の心境や思いを以下のように話して下さった。

「本音を言えば、早くコロナが収まって以前のように会食型で開催したい。配布型は多くの人に届けられるけど、代表の方が取りに来ることが多いためどんな人が食べているのか分からないし、何より喜んだ顔が見られないのが辛い。中には『弁当配布だから来た』という人もおり、参加者ともあるけど、自分たちのお弁当で誰かが幸せになってくれるならいいと思って行っている。イベントも地域交流の場でもあるし、子どもたちにたくさんの体験をさせてあげられないのが残念。うちは参加している方の氏名や地域を聞くことはないけど、コロナ以前から参加している家族や高齢者の方を見ると安心するし、居場所として成り立っているなど感じる。」（よつ葉子ども食堂の運営者への電話インタビュー、2022年2月1日）

参加者が増えた喜びと共に、配布型を行ったことでコロナ終息後の活動形態に不安を持っていた。しかしながら、以前から参加している家族や高齢者の方が来ることで居場所として成り立っているという安心を感じ、参加者の方が増えることによりさらに地域に必要とされる場所へ変化したことがコロナ禍で新たに得られたものだ。活動形態を変化させたことで、さらに多くの人に必要とされる場所になったと考える。

第6章 社会変動に対応する子ども食堂に

本稿ではコロナ禍による子ども食堂の活動形態の変化や参加者の変化などにより、ニーズに応えながら変化していく子ども食堂の姿を調査した。多くの子ども食堂がコロナという社会変動に戸惑いながらも、柔軟に対応していくことで地域のニーズに応えていることが分かった。

今日も世界中で猛威を振るっている新型コロナウイルスにより、私達の生活は「新しい生活様式」というものへの対応を行っている。それと同様に子ども食堂もコロナにより、活動の方向転換を行った。それはコロナという問題に対応したことで地域のニーズに応えるものだった。その活動の方向転換は今後もさらに良い方向へ変化していくと考える。そう考える理由は2つある。

1つ目は「方向転換によるさらに必要とされる存在に変化」したことである。コロナ以前の会食型の子ども食堂では、居場所という存在であると共に会話をして築くことができる「つながり」を持つことも1つの目的であった。しかし、コロナ禍で会食型を実施することが難しくなり、「つながり」の部分が薄れてしまった。配布型になり、会話をすることができない中、新しい参加者が増え、「つながり」を持ちたいのに持てないというもどかしさが生まれた。子ども食堂のつながりは「弱いつながり」の部類に入る。それとは反対に家族や知人などが「強いつながり」の部類に入る。「弱いつながり」と聞くとマイナスイメージにつながるが、そうではない。「弱いつながり」は社会に必ず必要であるものだとされている。それはアメリカの社会学者グラノヴェッターが行った調査で証明されている。その調査は1970年に行われた調査で、事務系で働く人に無作為で現在の職を得た方法を調べた際、自分のことをよく知っている「強いつながり」の人より自分のことあまり知らない「弱いつながり」の人からの情報で知ったという人が多かったという調査結果になった。

家族や友人のような「強いつながり」は同じ価値観を持つ人や同じ生活環境などであるため、自分にとって新しい情報や創造の発展を得ることは難しく、自分が求めている情報が手に入りにくい。しかし「弱いつながり」では価値観の違う人や生活環境が異なる人と出会い、新しい情報を得ることで自分自身が求めている情報が手に入りやすくなる。「強いつながり」の人が知らないことを「弱いつながり」では得ることができる。子ども食堂以外の「弱いつながり」で挙げられるのがSNSなどのネットである。私達はSNS上でつながった人から多くの情報を得ることがある。これが「弱いつながり」の最大の特徴である。そしてその「弱いつながり」から得た情報は「強いつながり」へとつながっていく。なぜなら「強いつながり」では同じ価値観や同じ環境にいる人が多いからである。自分自身が求めている情報を「強いつながり」である友人などは同じように求めている。このように「弱いつながり」は「強いつながり」に大きく影響するのである。子ども食堂は口コミなどで知名度が上がっていった。今回コロナにより、多くの人が子ども食堂を必要とした。今までに「弱いつながり」を持ち、地域に寄り添っていたからこそ、今回多くの人が子ども食堂を必要とした。また、そこから新しいコミュニティが生まれていく。これまでの子ども食堂も「弱いつながり」であったが、そのコミュニティを知らなかった人はそのつながりを恐れていた。しかし、このように活動形態が変わり誰でも参加できるようになったことで、以前来ていなかった人たちが参加し、「弱いつながり」に触れることができた。コロナ禍前のように思うような「つながり」や「関わりを持てる居場所」でなくても、参加者たちにとって子ども食堂は「必要な場所」になった。このように良い方向へ変化した原因は、このような状況下でも活動を行った子ども食堂の存在である。コロナ以前より参加していた人にとってはこれまでと変わらない存在の居場所であり、コロナ禍以降の参加者にとっては新しいコミュニティになった。このようにコロナ終息後、柔軟に活動形態を変化させたことによって、子ども食堂の存在は以前より多くの人に必要とされ、コロナ終息後はコロナ以前よりも多くの人に必要とされる居場所へと変化していくと考える。

2つ目は「方向転換によるニーズ」である。今回コロナにより、多くの子ども食堂が配布型を行った。コロナ前はこのような事態になったら開催を中止せざる負えない状況だったが、配布型を行ったことにより、活動形態を変えることで活動を継続でき、必要とする人へ届けることが可能なことが分かった。また、コロナをきっかけに高齢者の方向けに配達型を検討している子ども食堂もあり、高齢化が進んでいる地域のニーズに沿った活動形態へ変化することで、子ども食堂はより頼れる場所に変化していくと考える。またこのように高齢者向けに行うことで、高齢者の確認ができ孤独死などを避けることも可能になるだろう。特に会食型を行っていた子ども食堂はコロナ禍の子ども食堂は子どもたちにとって、とても必要な場所だったと感じる。コロナにより外で遊ぶことが難しくなり、友達と会話をしながら食事をとることができなかったことで、ストレスを感じざる負えない状況下の中で、子ども食堂は彼らの心の支えになっていた。このような状況下に運営してくれたことで子どもたちにとって子ども食堂では家族以外に相談できる居場所へさらに変化していくだろう。これまでも東日本大震災などの社会問題により子ども食堂のニーズは変わってきた。子ども食堂の存在はこれまでも行政や学校、家庭などの支援が届かない人との隙間を埋めるニーズ、そこからあふれてしまった人のニーズだった。コロナ禍により支援が届かない人や溢れてしまった人が増えた今日、子ども食堂の存在は欠かせない存在へと変化した。

コロナや高齢化、貧困問題など様々な社会変動によって方向転換を余儀なくされた子ども食堂であったが、その方向転換は社会変動や地域のニーズに対応したことで、コロナ以前よりさらに多くの人が必要とする存在へと変化した。今後より多くの人に必要とされる存在になっていくと考える。

コロナ禍になり多くの子ども食堂が活動形態を変化させ、今日も活動している。運営者は多くの不安や葛藤を抱えながらの活動になっているだろう。それでも、参加者の方を思いながら、活動を行ったその姿はコロナ終息後の子ども食堂の存在に大きく影響を与え、多くの人達の心拠り所であり、必要とされる存在へと変化した。変異株などの出現などによりまだ終息の光が見えない中、柔軟に対応し子ども食堂を運営している方々を私は心から尊敬している。

【参考文献】

NPO 法人全国子ども食堂支援センターむすびえ、2021『第1回全国子ども食堂実態調査結果発表のお知らせ』（2022年1/28閲覧）

財経新聞、2021、『「地域みんなの食堂」となった「こども食堂」コロナ禍でも増え続け、6,000箇所を超える。』

厚生労働省、2021『新型コロナウイルス感染症流行下における子ども食堂の運営実態の把握とその効果の検証のための研究』（2021年12/20閲覧）

社会福祉法人 よつ葉の会ホームページ（2022年2/1閲覧）

成元哲・牛島佳代、2020「食卓をめぐるソシアビリテの誕生と変容」『中京大学現代社会学部紀要』14-2：113-126

土屋香乃子、2022、「すべての人歓迎 こども食堂、笑顔で満腹「幸せが連鎖したらいいな」」朝日新聞社

七星純子、2020、「ケア空間の多元化としての子ども食堂」、『千葉大学大学院人文公共学府

研究プロジェクト報告書』第 355 集 pp.14-30 2020 年
野沢慎司、2006、「リーディングスネットワーク論：家族・コミュニティ・社会関係資本」
村上靖彦、「居場所とリズムのゆるみ」『現代思想』
よつ葉レストラン Instagram (2022 年 2/1 閲覧)